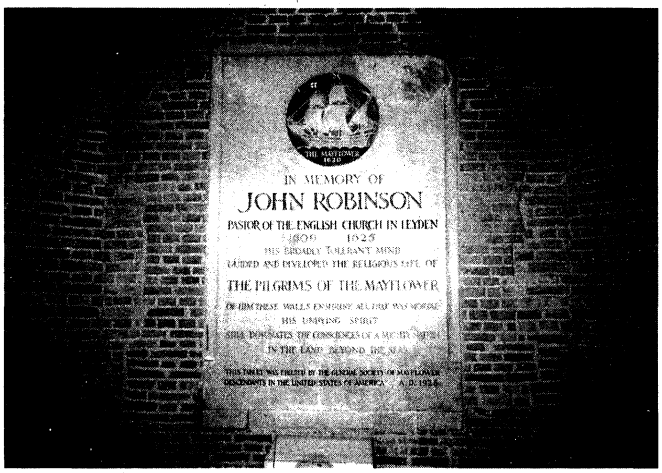
オランダのピューリタン
序論　レイデン

田　江　安　廣

（1997年10月14日　受理）



メイフラワー協会（アメリカ）からレイデンに贈られたプラーク。ピーターズ協会の内部にある。

ハーグにあるオルデンバルネフェルト像。

ブッシュ前大統領が多忙なスケジュールの合間を縫ってオランダのとある小都市を訪れたのは1989年７月17日のことである。その都市とはレイデン（又はライデン。Leiden 又は Leyden）と呼ばれる人口11万ほどの大学町である。時のアメリカ大統領の訪問は小国オランダの静かな町にかなりのセンセーションを巻きおこし，地方紙はもとより全国紙にもその様子が写真入りで報道された（アムステルダムの De Telegraaf 紙，ロッテルダムの Dagbladunie 紙，レイデンの Leidsch Dagblad 紙など。レイデンの Leidsch Dagblad 紙，Ruud Paauw 氏の協力による。）

７月17日月曜日10時半にスキポール空港に到着してから翌18日11時50分に同空港を出発するまでの短時間にハーグのビネンホフ（中庭を意味する語。国会議事堂，総理府，外務省などの建物が集まる）を訪問し，レイデンにも立寄ったのだった。前大統領のレイデン訪問にはそれなりの理由があった。イギリスのプリマス港から新大陸にメイフラワー号で渡った人々の中にレイデンで11年をすごしたピューリタンが含まれており，後に彼らはピルグリム・ファーザーズと呼ばれ，建国の父たち（Founding Fathers）と共に，広く世に知られることになるからである。このグループの中に

プリマス植民地の初代総督ジョン・カーヴァー，プリマス植民地の歴史を書き，長年総督をつとめたウィリアム・ブラッドフォード，レイデンで「ピルグリム・プレス」を創設，出版したウィリアム・ブルースター，軍人マイルズ・スタンディシュらが含まれていたのはいうまでもない。そのうえ，ブッシュ大統領の先祖を辿ってみたところランカスターのスタンディシュ家とのつながりから，スタンディシュと縁故があることが判明したというのである。[1]周知のようにスタンディシュはN・モートンの『ニューイングランド・カナーン』やN・ホーソーンの短編に言及される峻厳な軍人である。ブッシュ氏も軍人だったことは何らかの因縁だろうか。[2]

ブッシュ氏のレイデン訪問は人々にオランダとアメリカとの関わり，特にピルグリムたちについて幾分なりとも認識させる契機となった。訪問10日前の新聞にはピルグリムについての特集が組まれ掲載されたのである。訪問当日，ピルグリムたちとゆかりの深い聖ピーターズ協会でベアトリックス女王による歓迎式典が催され，オランダとアメリカとのつながりが回顧され，その意義が未来に向けて再考察された。

大統領のレイデン訪問は一つのエピソードであるが，英国のスクルービーからアムステルダムを経てレイデンに移住した分離派の足跡も長い歴史を持つレイデンにとっては一つのエピソードである。エピソードであるが故にピルグリム研究の焦点はイギリス本国での当時の政治状況，あるいは新大陸移住後の彼らの行動にあてられ，オランダ滞在時のピューリタン，ピルグリムについて深く触れた研究は多くない。本稿では17世紀の英蘭の関係を概観したのち，大学の歴史を含めて，レイデンの歴史を管見し，続稿でピルグリムを含めたオランダのピューリタンについて考察する。

I

まず当時の英蘭両国の関係について大まかに触れる必要がある。この点に関してK・スプランガーの著『オランダのピューリタニズム』が役立つ。[3] スプランガーは2度のサバティカル休暇で英蘭両国を訪れ，周到なリサーチによってこの著以外にもオランダとピューリタン関係の書物を著わしている。論述は明快，資料と説得力に富み，楽しく歴史を読ませる稀な学者の一人である。

当時の英蘭両国の関係はどのようなものだったのだろうか。スプランガーはJ.R. ジョーンズやC. ウィルスンらを援用しつつ，英国は他のどの国とよりもオランダとのつながりが深かったことを指摘する。英蘭両国はカトリックスペインと闘争状態にあり，プロテスタント精神を共有し，貿易の取引相手でもあった。女王エリザベスの言葉を用いればオランダは「もっとも古い，もっとも親しい隣人」なのである。

英国人の新大陸移住はよく知られているがヨーロッパ大陸への移住も1650年ころまでには新大陸への移住と同数，あるいはそれを上回っていた。「ニュー・イングランドをとるべきかオランダをとるべきか」迷った末，避難の場としてオランダを選んだ人も少なくなかったのである。その逆にカトリックスペインの怒りを免れるためオランダから英国の諸都市（ロンドン，ノーウィチ，ヤーモス，サザンプトン，カンタベリー等）へのがれたプロテスタントもいた。低地地方のフラマン人

の英国移住は新しい織物の技術を英国にもたらすことにもなった。

今日でもそうだが，オランダには外国人の共同体的要素がある。オランダ連合州（The United Provinces）がスペインから独立した後，寛容政策をとるようになって以来，さまざま職種，国籍の人々が流れこんでくる。当時の商業中心地では6～7カ国語がとびかっていた。そこには英国のブラウニスト，ユダヤ人，商人，船乗り，職人，「芳しからぬ」本の著者，非正統派の哲学者がいた。オランダの寛容政策は商売の繁栄と人口増加をもたらしたのである。

当時，英国からオランダへ渡航した人々の職種はどのようなものだったのだろうか。まず第一は兵士であった。スペインに対峙するべくオランダに送りこまれた兵士は1585年以来5,000人から6,000人，1621年までに送りこまれた英国の4個連隊とスコットランドの2個連隊の総数は13,000人であった。

第二はオランダの諸都市に教会というコミュニティーを形成する英国人である。レイデンでは1609年に200世帯が居住許可を求め（ジョン・ロビンソンに率いられた分離派のグループ），フラシングでは1619年に128，ユトレヒトでは1623年までに120，デルフトでは1636年に70の世帯が居住許可を求めた。アムステルダムでは1623年までに，ある一つの教会員数は450人に達していた。これは6つある教会の一つにすぎないのである。英国と何らかの取引のあるオランダの都市には必ずといっていいほど彼らの“Engelse kerk，Engelse huis，Engelse kaai”が見うけられハーリンゲン（オランダ北部フリースラント地方の小さな町）の売春宿にすら英国人のしるしが確認されたのである。

軍人，非国教徒の他にオランダに渡った英国人は営利を目的とした商人，労働者，そして学生である。もともと英蘭は貿易で経済的なつながりがあったが，17世紀オランダの海運力は例えば1670年においてさえ，英国，スペイン，ポルトガル，仏，スコットランド，独を合わせた船舶数を上回るほどであった。英国の大陸との商取引は冒険商人（Merchant Adventurer）に掌握されていたが，他にもオランダでひともうけしようと渡航する商人や職人がいた。彼らは「信仰の自由」の名目の下にオランダに渡り，家族をよびよせた。

オランダに渡航した学生たちが第一に選んだ大学は1575年に創立されたレイデン大学であり，次が1585年創立のフラネカ大学だった（ナポレオン侵攻の際に1811年廃止された）。1575年から1675年の間におよそ950人の英国系の学生がレイデン大学に入学している。フラネカ大学は地理的に必ずしも恵まれなかったがウィリアム・エイムズが1622年から33年まで神学教授をつとめたこともあって1年に2～3名が集まったとされるが実数はそれより多いとスプランガーは考えている。1636年創立のユトレヒト大学も1660年後，多くの非国教徒の英国，スコットランドの学生を集めた。オランダのカルヴィン神学は英国のピューリタンにとって魅力的だったのである。

総じて言えば，英蘭両国の関係は17世紀に三たび砲火を交じえたとはいえ，その関係がとりかえしのつかない決定的な破綻をきたすまでには至らなかった。

Ⅱ

英国人どうしの争いやスキャンダルの多いアムステルダムからジョン・ロビンソン一行が移住したレイデンとはどのような町だったのだろうか。一行の移住の動機を推し計るためにも，当時の生活状況を知るためにもこの点は重要である。

16世紀にローマの道路地図が発見されたとき，ライン河口のルフドウヌム（Lugdunum）という名の土地にローマ人が居住していたことが記されていた。ルフドウヌムが正確にどこにあったのか議論されるが，ハーグ西近郊のロースドーネンかレイデンの西北近郊ラインスブルフとヴァール川の間に設けられた50ヶ所の防衛地点のうち，最も重要な拠点が恐らく現在のレイデンにあたると『オランダ史』のブロールは推測している。[4)]

レイデンの歴史は10世紀になり活気づく。[5)] ユトレヒトのビショップたちによる支配に入った時期である。このころ二つのライン川支流の間の小島に洪水その他の危険からのがれるため人工の丘が作られた。オランダ国土の37,000平方ｋｍは海面下にあり堤で水の侵入を防ぎつつ，ポンプで排水して水位を一定のレベルに保たなければオランダの全人口の3／4にあたる人々が住んでいるブレダ，ユトレヒト，ズヴォレ，クローニンゲンなどは海面下に没してしまう。もともとホラントHollandは「くぼ地」を意味する語であるが，オランダの最高地点でも海抜321ｍにすぎない。往時は堤防に見張りが置かれ，怠れば処刑されるほどであった。人々は水のおかげで暮らしている（thanks to water）が，オランダでは「水に抗して」（in spite of water）暮らしているのである。[6)] かくして水はオランダ人の生活，性格を規定する最大の要素となる。

さて人工の丘に防塁が建設され，このそばに村が形成される。1050年ころ，この村が現在のレイダードープの昔の名（Leithon）を奪って，現在のレイデンとなったのである。11世紀後半，ホラント伯がレイデンに居住し，レイデンの将来が約束されることになる。

1100年ころになるとレイデンではライン川の水位を何とか調節できるようになる。数多くの堤が建設されたが，これはレイデン市全体の協力によってはじめて可能であった。これがこの地区のwater boardのはじまりであり，後にPolder and Dike Board of Rijnlandと呼ばれるようになる。今日，このwater boardが水位の調節，水質の管理について責任を負うている。水位が調節できるようになれば人が集まってくるのは自然の勢いである。まず漁師ついで職人たちが集まり，靴，衣類の売買が行われる。この結果この地区の最も重要な市場となる。これに加え，1247年ウィレム２世はドイツの支配者となりレイデンはホラント伯を支持していたこともあって多くの特権を与えられた。ある種の免税措置はその一例である。人口は着実に増加した。産業の中で最も重要な位置を占めるのが織物業で，レイデンの織物は質の高さから内外に知られるようになる。

しかしながらレイデンの人口を阻止したのは黒死病の流行でこれは1350年から市民を襲ったものである。1500年には織物業が沈滞し，人口は減少し，町の発展に打撃を与えた。その後の人口についてはＧ・パーカーの名著『オランダの反乱』に詳しい。[7)] 同書によれば1514年の北ホラントには79,000人，南ホラントには194,000人が居住し，これが1622年には北は188,000人（138％増），南は

482,000人（156%増）を示し，1622年の南北の人口の総計は670,000人で，その44%が425の村に住み，56%が28の町に居住していた。このとき人口で第2位を占めるのがレイデンで1570年12,000人であった人口が1640年には65,000人にまで増加する。これは織物業の繁栄が原因で，1570年には年間500反の生産量だったものが次の10年間に3,500，1620年には10,000反にまで増産を示している。ここで注目すべきは移民がこの産業において果たした大きな役割である。レイデンには1580～1630年の間に10,000人以上の移民が居住しその半数はフランダースの織物業の町の出身者であった。1580年の調査によれば40%がレイデン市以外の出身者であるとパーカーは述べている。

次に触れるべきはレイデンにまつわるもっとも有名なエピソード，即ちスペイン軍によるレイデン包囲と解放についてのエピソードである。[8)]

スペイン王カール5世の寵臣であったウィレムはカールの息子がフィリペ2世として即位して後，次第に疎んぜられるようになる。王位を退くあたってカールが息子に与えた忠告はオランダの統治にあたってはスペイン人は要職に就かずオランダ人に任せることとし，その職名まで具体的に示した。ヘント生まれのカールには低地地方は彼の生まれ育った土地であって，彼自身の言葉によれば10度もこの土地に足を運ぶほどだった。しかしフィリペ2世は自国の側近をのみ重用し，ウィレムは自国の事柄に関してつんぼ座敷に置かれることになる。ウィレムの伝記作者ウェジウッドによればフィリペとウィレムが出会ったのはフィリペ22才，ウィレム16才のときであるが，二人は性格において水と油だった。フィリペが内気，どもりがち，神経質，理論家だったのに対し，ウィレムは自由闊達，自信にあふれ，健康に恵まれ，実務的だった。二人をつなぐいかなる橋も存在しなかったのである。そのうえ，フランス王から，アルヴァ公を用いてオランダのプロテスタント教徒の殺戮計画があることを知らされたとき，オランダ生まれでないウィレムもはじめて，彼を愛する「粗野で，頑固で，活力に富む国民」に対して愛情を感じた。臣下としての忠誠の義務か，生まれ故郷のディレンブルクで教えられた道徳規範のどちらかの選択を迫られたウィレムは王よりもオランダ人民を，忠誠よりも道徳的善を選んだのだった。

スペイン軍によるレイデン包囲は1573～1574年であるが，ハールレムは1573年7月11日に陥落していた。アルヴァ公はオランダ人の憤激を考慮してハールレムに対し寛大な措置をとるよう息子に命じていたが，彼は父の命に従わず，すべての軍人と選び出した市民合わせて2,000人を処刑した。この時以降，「降服」の文字はオランダ人にとって無縁となった。しかしナールデン，ズマトフェン，モンス，ハールレム陥落でウィレムは手袋をしたまま戦っているのかと批判を浴びることになる。アルヴァ公の息子がアルクマールに侵攻した際ソノイは一計を案じ堤を破壊してスペイン軍を撤退させることに成功する。1573年10月12日のことである。

レイデンの一次包囲の際，包囲に備えて食料の貯えがあったため持ちこたえられたが，スペイン軍が急に撤退したため多数の市民は安心感からウィレムの忠告を無視して食料の貯えを怠った。再度の包囲に食料は底をつきレイデン市民はねずみの肉，ゆでた動物の皮，木の皮などを食べてよく持ちこたえた。「主は与えたもう」という言葉（現在，市役所の壁に刻まれている）を信じるかの

ように。スペイン軍は徹底的な兵糧攻めにより，降伏を呼びかけた。この呼びかけに対する市の返答は伝説になっている。

> われらの町に犬，牛，馬がいることは聞いておられよう。よし，これらを食べ尽くすともわれら一人一人には食料となる左手が残っている。暴君と血ぬられた司祭どもをわれらの城壁から打ち払う右手が残っている。最後に力尽きるとも・・・われらは決してわが国土の自由を譲り与えたりはしない。お前どもの利益となり，奴隷となるくらいなら，時，最後に至ればわれらの町を炎で包むほうがましである。[9]

レイデン市民が降伏しなかった背景にはハールレムやナールデンでのスペイン軍による市民殺害の他に町の指導者たちに負う所が大きい。市長のファン・デル・ウォルフ，補佐のヤン・ファン・ホウト，彼の友人ヤン・ファン・ドゥーサという面々である。

陸上では数において劣勢である以上，市民は水の助けをかりるより他なかった。レイデンはアイセルとムーサの間に位置し，海面下にある。ロッテルダム上方にあるこれらの川の堤を破壊すればレイデンは水びたしになるという計画でありウィレムの軍事顧問も賛成した。しかしロッテルダムからレイデンまで距離にして22マイル，しかもレイデンは海面下とはいえ地形的にはロッテルダムよりこころもち高い。その上，強風と高潮が必要であり夏の盛りにこの二つが同時に起こることはおよそ不可能と考えられた。ハールレムが陥落したのちレイデンが陥ちれば取り返しのつかない事態であった。堤防は破壊されたが一向にその気配はあらわれなかった。ウィレムはデルフトに着き教会で祈りつづけた。教会に人々の祈りが途切れることはなかった。

10月1日，ついに北西の強風が吹き，高潮と相まってレイデンは水びたしとなった。スペイン軍はパニックにおち入り撤退した。賭けは成功した。神風が吹いたのである。

洪水と援軍の到着を恐れてスペイン軍は退却したが，このとき市民の1／3が餓死していた。永遠に続くかと思われた包囲から解放された人々はピーターズ教会に向かって行進をはじめた。市民はみな子供のように泣きじゃくっていた。伝説によればこのとき退却したスペイン軍の残した食糧フッツポットを少年が見つけ，配給された白パンとニシンを食べて解放を祝う習わしとなって今日までつづいている。尚，包囲のときレイデンを逃げ出した市民は Leidse glipper と呼ばれ，真のレイデン市民 Leijenaar のみがこの発音が出来るそうである。

フリードリヒ・シラーは『オランダ独立史』において16世紀を最も輝かしい世紀となした最も注目に値する国家的事件の一つはネーデルランドの自由の建設と述べているが，[10] レイデンの包囲と解放はオランダ独立史の中でひときわ象徴的な出来事である。

レイデンを織物業と共に特徴づけるものがこの解放を契機として創立されたレイデン大学である。レイデン市民の勇気を称えてホラント州とゼーラント州はウィレムのあっせんにより大学を創立した。ありきたりの記念碑などでなく国と共に発展してゆく大学を創立した点にもウィレムの偉大さ

があらわれいるとウェジウッドは述べている。第二次大戦でドイツ軍がオランダを占領した際，政策の一つとして行われたのがレイデン大学の封鎖だった。何度も敗走をくり返しながら，スペイン軍と戦いつづけたウィレムの伝記に緊迫性があるのは，この書が書かれ，出版された時期，英国がドイツとの戦いの最中だったことと無縁ではあるまい。

レイデン大学はどのように特徴づけられるだろうか。オランダ人の性格が取引的性格と規定できるなら，大学もまた知識の交換の場（exchange）としてとらえることも可能である。この視点からJ・J・ヴォルテヤルはレイデン大学の歴史を語っている。[11] レイデン大学は1575年2月8日にプロテスタントの大学として創立されたがこの場合のプロテスタントの意味は厳密なカルヴァニズムの意味あいと同時に，より寛容でリベラルな意味も含まれている。創立時の目的は統一国家たらんとするときに必要な政治的リーダーシップと宗教的自律を可能にする知的，精神的中枢を確立することであった。厳密派は大学と大学外の権威を峻別すること，ローマ・カトリックを禁止することを主張して，字義通り，厳密な解釈によるプロテスタント大学を目指した。これに対し寛容派（これにはオレンジ公ウィレム，ドゥーサ，大半の市政関係者が含まれていた）は出来るだけ広義なプロテスタントの大学を希望した。ローマ，カトリックに対してすら，ある程度の自由を与えて然るべきと考えたのである。1575年5月にすでに4人の教授は大学当局に意見書を提出していた。その内容は大学と教会との結びつきの必要性を強調すると同時に，大学外の権威を避けることであった。しかし，この考えは否定され1575年6月2日の大学設立法は大学の管理を州と市に委ねた。かくして大学に対する教会の影響力行使の意図は退けられた。大学の寛容の精神はリプシウス，ドドネヤスなどの登用によって明らかである。ユマニストのリプシウスは1578年レイデン大学の教授に任命され数冊の書を著わしたが，その精神はストア派のものでカルヴァニズムの影響は示していなかった。彼は大学の精神を体現した人物と見なされ，大学を去るとき大学当局は彼が去れば大学の崩壊をきたすと手紙を書いたほどである。ウォルカニウスの名も忘れてはならない。彼はギリシア語教授でリプシウスと同じくユマニストの精神を体現した人物だった。

教会は大学の自由を認めたが，大学の神学者は教会の教義と告白の信奉者となるべきことを主張したため，大学における神学者確保が困難となり，また見つかっても引き留めておくことが困難になるという事態が生じた。論争，当局との軋轢から辞任が相つぎ，1584年アドリアン・セラウィアの確保によって事態は解決したかに見えたがイギリスの総督レスター伯と親しかった彼はレスターが女王エリザベスからリコールされるに及んで，彼自身もイギリスに去るより他なかった。レスターはカルヴァニストに友好的だったが温健派が勢力をもり返さぬうちにまた様相が変化する。スペインのパルマによって率いられた軍隊がオランダの諸都市を次々に占領すると多くの戦闘的カルヴァニストが南からのがれてきたのである。彼らは1591年に委員会を設立し，レイデン大学に多くの問題を提起した。そのうちの一つは大学においては真のキリスト者でないものは登用されてはならないとするものだった。諸州はこの考えを支持しなかったものの事実上この考えは実行された。1591

年，13年間の滞在ののちリプシウスは南オランダに去りロニウィアンのラテン語教授となる。

1587年　L・トレカティウス，1592年F・ヤニウスの任命によって大学は厳格派とはいえ，平穏をとりもどし，“mildly orthodox”な大学として繁栄を始めたかに見えた。しかし1603年ヤニウスの死後，新たな事態が招来する。1603年アルミニウスの登用によって生じたアルミニウス派とホマレス派の対立である。その著『ヨーロッパ大全』でヨーロッパにおけるプロテスタンティズムの受容の度合いをローマからの距離，識字率，家族制度の三つの要因によって明快に分析，説明したトッドはアルミニウス主義の受容の要因を聖職者権力への異議申し立てに有利な地上的条件（識字率とローマからの距離）及び絶対核家族（自由主義的親子関係，非平等の兄弟関係）に見い出している。[12] アルミニウス主義は神の権威についての自由主義的ヴィジョンと聖職者の権威についての自由主義的ヴィジョンを合わせ持ち，いかなる超越的権威も退けるものであるが，やがてこれはヨーロッパで最も柔軟で寛容な宗教体系の一つとして姿を明確にすることになる。[13]

アルミニウスは1560年アウデヴォーターに生まれ，後アムステルダムの商人たちのギルドの費用でレイデン大学で学び，その後もジュネーブ等で学んだ。ローマ滞在中，アムステルダムに招かれて1588年から15年間，牧師，説教師，教育者として働いた。そして1603年，レイデン大学神学部に迎えられる。彼は1608年，宗教会議で運命予定説，自由意志，神の恩寵，救いの確かさ，イエスの神聖等について自説を述べた。問題となったのは彼がリベラルな考え方の持ち主で，特に自由意志についてそうであったこと，恩寵は選ばれた人でなく万人に及ぶと考えたことである。運命予定説はカルヴァニズムの重要な教義の一つであったことから同じレイデン大学の神学者ホマルスと意見の相違をきたすこととなった。1610年，アルミニウスの死後，彼の支持者が運命予定説に対する抗議書を州議会に提出した。これに対し1611年ホマルス派から反論が加えられた。論争を複雑にしたのは休戦の締結にあたって意見の対立していたウィレムの遺児モウリッツ王子とヤン・ファン・オルデンバルネフェルトがそれぞれホマーレス派（厳格派）とアルミニウス派（寛容派）を支持したことである。ホラント州はオルデンバルネフェルトとアルミニウス派を支持した。予期された如く，諸州の議会はホラントに対しモウリッツを支持し，1616年ドルトレヒトで全国宗教会議を開催，席上，アルミニウス派の教義は退けられた。この間，モウリッツ派はユトレヒトをはじめとする諸都市でオルデンバルネフェルト，アルミニウス派の人々を退け，次々に自派の人々に入り替えていった。議会は事を黙認し，彼に全権を与えていた。モウリッツはついにオルデンバルネフェルト，グロチウスをはじめとする4人の指導者を投獄し，1619年5月13日，共和国の建設に一生を捧げてきた72才のオルデンバルネフェルトをビネンホフで処刑した。これは未だ独立後，間もない若い共和国がくぐり抜けなければならなかった政治的，宗教的対立という試練であった。[14]

レイデン大学でも「粛清」が，過激ではなかったが行われた。大学の評議会，神学科，哲学科のメンバーは入れ替えられた。1611年レイデンを去っていたホマルスはよびもどされなかった。論争に再び火がつくのを恐れた4名の神学者は神学と教会事項について意見の一致をみた部分のみを提出し，1625年 Synopsis Purioris Theologie を出版した。かくして創立50年後，比較的自由な精神

の大学として出発した大学は厳格なカルヴァニスト的気風の大学へと変貌した。しかし評議会にとって何にもまして平和が望ましかったのである。

「運命予定説」という神学上の問題を政治的解決に附することは良い結果をもたらすものではない。この対立はイギリスのピューリタンの関心をよび「アルミニウス派」という語は以後，ののしりの言葉と同義となり，アルミニウスという名は本来のアルミニウス自身の考えから切り離された文脈で用いられるようになった。

ラテン語がコミュニケーションの手段となっている大学では小国の神学者を雇うのは容易であったが，大学の外では自国語が話されており言語の障壁があるため人材を見い出すことは容易でなく，ためにオランダ人の牧師だけがその職務を果たしていた。その上，Reformed Church では牧師の結婚は認められたが，給与が低く，魅力的ではなかった。文献学に於いても事態はさほど変わらず，著名な学者グロチウス（11才でレイデン大学に入学，14才で卒業）は学校や大学の外に職を求めたのである。アルミニウスが大学の最初のオランダ人神学者だったことは偶然ではない。

レイデン大学の16，17世紀の基盤を作ったのはドウーサであった。貴族であり，詩人であり，ユマニストであり，25年間，大学の評議員を勤めた彼は，その洞察力とヴィジョンによってレイデン大学をヨーロッパの要の位置にまで高めんと欲したのだった。リプシウスや Scaliger をレイデンに招聘したのも彼の功績である。この二人なくしては大学は雄弁術や古典学，東洋学，新約聖書研究において今日の地位を獲得出来なかったであろう。ドウーサの三つ目の功績は彼が大学図書館の原動力だったことである。現在もレイデン大学図書館に彼の名を冠したセクションがある。[15)]

大学の繁栄はそれを包む周囲の環境と切り離せない。レイデン大学の繁栄は国と都市の経済的発展と軌を一にしている。印刷，出版と経済発展，学問との相互作用がそれを証明している。とはいえ，本も給与も他の場所で得られようが，何よりも得がたいもの，それは「自由」である。厳格派が大学の実権を握ったときですら，大学では自由は死んではいなかった。少数派のローマ・カトリックは残り，ユダヤ人もかなりの自由を享受し，アルミニウス派も彼らの教会の建設を許された。オランダはスピノザやデカルトのような人物が生活し，仕事が出来る場所である。その思想が古くさいものであれ，新しいものであれ，熟したものであれ，未熟なものであれ，そのいづれもが表現の自由を与えられている場所なのである。

つづく

注

1）J. W. Tammel ed., *The Pilgrims and Other People from the British Isles in Leiden* 1576-1640 (The Mansk-Svenska Publishing Co. Ltd: Isle of Man, 1989), P. 13.

2）オランダ人を先祖に持つアメリカの大統領にはアダムズやフランクリン・ルーズベルトがいる。

3）Keith Sprunger, *Dutch Puritanism* (E. J. Brill: Leiden, 1982) 以下の英蘭関係の叙述はこの書による。

4）モーリス・ブロール，『オランダ史』（白水社，1994），P. 9.

5）以下，レイデンの歴史についてはレイデン市発行の“A View from Leiden”によるところが大きい。

6）後述の Water-Board of Rijnland の“we and water”のリーフレットの文句。

7）G. Parker, *The Dutch Revolt* (Penguin Books: Harmondsworth, 1990), PP. 249-250.
8）レイデン包囲と解放の叙述は以下の書による。C. W. Wedgwood, *William the Silent* (Jonathan Cape: London, 1944)
9）Parker, P.160
10）フリードリヒ・シラー，『オランダ独立史』（岩波文庫，1996）上巻 P. 20.
11）Introduction in Th. H. Lunsingh Scheurleer and G. H. M. Posthumus Meyjes eds., *Leiden Univversity in the Seventeenth Century*: *An Exchange of Learning* (Universitaire Pess Leiden / E. J Brill: Leiden, 1975) 大学の歴史の叙述は J. J. Woltjer のこの Introduction による。
12）エマニュエル・トッド，『新ヨーロッパ大全』（藤原書店，1994）第一巻 P.155.
13）トッド，P.177.
14）P. J. A. N. Rietbergen ed., *A Short History of the Netherlands: from Prehistory to the Present Day* (Bekking Publishers: A mersfoort, 1994) PP. 79-83. 大野真弓編，『世界の歴史』第8巻（中央文庫，1993）PP. 86-94.
16）大学の歴史の資料はドウーサから借り出したもの。